

# 琉球大学学術リポジトリ

「平和と教育」の授業実践 —グループによるプロジェクト学習を中心に—

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部附属教育実践総合センター 公開日: 2008-04-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 藤原, 幸男, Fujiwara, Yukio メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/5640">http://hdl.handle.net/20.500.12000/5640</a>

## 「平和と教育」の授業実践 — グループによるプロジェクト学習を中心に —

藤原幸男\*

### Teaching Practice of 'Peace and Education' in Teacher Education

FUJIWARA Yukio

#### はじめに

琉球大学の教職科目である「平和・人権と教育」は、教育職員免許法上「総合演習」に位置づく13の授業科目のうちの1つである。教育学教室の教員2名で受け持ち、藤原幸男（教育方法学）が「平和と教育」を、佐久間正夫（教育行政学）が「人権と教育」を担当し、それぞれ7回ずつ行い、両方の成績評価を照合して調整の上最終的な成績評価を出している。

「総合演習」は1998年の教育職員免許法改正で新設された科目で、「人類に共通する課題又は我が国社会全体にかかわる課題のうち一以上のものに関する分析及び検討並びにその課題について幼児、児童、又は生徒を指導するための方法及び技術を含むものとする」という説明が「備考」に付記されている。

「平和と教育」では、「総合演習」の趣旨にそって人類に共通する課題として「平和」をとりあげ、「平和をめぐる諸問題」を講義するとともに、それに関わるビデオ（ドキュメンタリー報道番組など）を見せて、生々しい現実に触れさせるとともに、そこに登場する人物の身になって共感的に考え、わが身に置き

換えて主体的に思考することをさせてきた。その上で、平和教育の目的・内容・方法、平和教育の授業について具体的な実践事例を織り込みながら講義してきた。

今回（2005年度後期）はこれに加えて、グループによるプロジェクト学習に取り組みせ、プロジェクト学習の成果発表会を行った。初めての試みであるので、それを中心にしながら「平和と教育」の授業実践を報告したい。

#### 1. 「平和と教育」の授業実践の全体構想

「平和と教育」は、「戦争と平和をめぐる認識を問い直すとともに、平和教育のイメージをゆたかにして、具体的な実践方法を知る」を授業目標にして、担当の7回分を次のような内容構成で組み立てた（「授業シラバス」から抜粋）。

「平和と教育」の授業は、講義、ビデオ視聴、プロジェクト学習への取り組み、の3つからなる。毎時間の終了時に授業への感想・コメントを書いてもらい、それをまとめて次の時間に『「平和と教育」通信』を作成、配布し、受講者へのフィードバックを行った。

\*琉球大学教育学部

授業予定：

第1回 はじめに——平和概念と平和学（平和研究）

（1）平和のイメージ （2）平和でない現実 （3）自虐史観批判と愛国心・平和貢献の要請 （4）平和教育マンネリ化——お説教、飽きた—— （5）ガルトウングの「平和」概念 （7）核抑止論

第2回 戦争とは何か——イラク戦争をとおして——

ビデオ「新アジア発見、広島を伝える少女・インド」(25分) （1）同時多発テロからイラク戦争まで （2）戦争と「参戦権」 （3）戦争のルール——「交戦権」行使への制約 （4）国際連合と「侵略」制裁 （5）自衛のための戦争

第3回 原爆と平和教育——戦争体験の継承（1）——

（1）戦争と情報規制・出版規制 （2）核と平和 （3）戦争責任 （4）イラク戦争との関連 ビデオ「イラク戦争の原点は58年前にあった」(90分のうち50分視聴)

第4回 沖縄（沖縄戦と基地）と平和教育——戦争体験の継承（2）——

（1）沖縄における平和運動と平和教育のあゆみ （2）沖縄戦と平和教育——「体験談退屈」の英語入試問題—— （3）沖縄米軍基地と平和教育——アメリカ同時多発テロと修学旅行取り止め—— ビデオ「沖縄戦をどう語り継ぐ（ひめゆり平和祈念資料館リニューアル）」(25分)

第5回 沖縄における「平和と教育」についてのグループ発表

第6回 平和教育の目的・内容・方法

（1）平和教育の目的 （2）平和教育の目標の設定——「平和の文化」の視点からの構造化—— （3）平和教育の内容 （4）平和教育の方法 （5）平和教育のカリキュラム ビデオ「報道特集、核大国見た長崎の若者」(25分)

第7回 平和教育の授業

（1）平和教育の方法の多様化——6.23「慰霊の日」の新聞記事から—— （2）平和教育実践（①川崎かよ子「十五年戦争を考える」、②嘉納英明「日本国憲法と沖縄——基地の中の沖縄——」）の検討 ビデオ「課外授業・ようこそ先輩、地球の法律をつくる（土井香苗）」(32分)

講義は、学生たちの「平和と教育」への関心が高いことを想定して、既存の「平和」観、「平和教育」観にゆさぶりをかけ、新しい「平和」観、「平和教育」観を獲得させることをめざした。具体的には、「平和」概念についての新しい規定（ガルトウング）、戦争に関する国際法、戦争報道と情報操作など、平和についての既存の見方・考え方を覆す見解や事実を提示・説明して問題意識をかきたて認識を高めることに重点を置いて組み立てた。時間に制約があるために、資料等をプリントにして配布し、それをもとに講義した。

ビデオ視聴については、上記の講義と関連して、具体的な問題（核廃絶、沖縄戦体験の継承）に取り組んだ高校生・大学生のようす、

長崎原爆・イラク戦争におけるアメリカの情報操作、小学生を対象にした青年弁護士の課外授業など、テレビで放映された衝撃的な報道特集番組を中心に見せた。いずれも、中心人物の視点から共感してその問題を考え、衝撃的な事実を自分の経験と照らして見つめることのできる内容で、強いインパクトを与えるものである。

しかしこれまでの授業経験からすると、講義、ビデオ視聴は、学生たちを聞く立場に置き、教わるという姿勢を強めるという側面を持っている。授業回数に限られているために内容が盛り沢山で授業テンポが早くなりがちで、回が進むにつれてついていけないで参加意欲が低くなる（欠席者が少しずつ増える）

傾向も見られた。そこで今回、思い切って授業内容を縮減して、課外活動としてグループによるプロジェクト学習を取り入れ、授業の1回分をその発表会にあてることにした。以下で、課外活動としてのグループによるプロジェクト学習について報告したい。

## 2. グループによるプロジェクト学習の取り組み

授業登録した学生は、教育学部の学生である。学校教育教員養成課程（理科、社会科、家政科、英語科、障害児教育）9名、生涯教育課程（日本語教育、島嶼文化教育、生涯健康教育）11名、科目等履修生1名、の計21

名である。受講学生の年次は、2年次8名、3年次6名、4年次6名、科目等履修生1名である。

第1回の授業時に、グループによるプロジェクト学習をして授業で発表会を行うことを宣言し、次のようなシートを配布した。グループ編成については受講者名簿にそって授業者が編成したものを配布したが、登録取消・追加登録の変動がかなりあり、このグループ編成は意味をなさなくなった。それで第2回の授業のときにグループ編成をし直した。最終的には21名の登録者で、同学年・同学科を基準に4班（5～6名ずつ）に分けた。

### <沖縄における「平和と教育」についてのグループ発表>の要項

2005.10.14 「平和・人権と教育」

1. 「平和と教育」の問題を考えるには、地域素材を自ら「歩く、見る、考える」ことが大切です。沖縄のあちらこちらに格好の素材がころがっています。⇒そこで、沖縄の「平和と教育」にとって重要な遺跡（施設）あるいは事物を取り上げ、グループで調べ、レジメにまとめ、発表してもらいます。

#### 2. テーマ例：

平和記念資料館（沖縄県立平和祈念資料館、ひめゆり平和祈念資料館など）  
沖縄の「戦争と平和」についての絵本・読物  
沖縄における「平和学習」修学旅行ガイドブック  
沖縄の米軍基地（普天間・嘉手納） など

#### 3. レジメの内容

- ・どんなものがあるか
- ・どんな内容か
- ・沖縄の「平和と教育」を考える上で重要なこと
- ・調べてみての「感想」

#### 4. およその分量

A4用紙4枚（A4用紙2枚を縮小＜A3⇒B4＞）

\*写真や絵・図を入れてもよい。

#### 5. 発表時間

15分発表 5分質疑応答

#### 6. 発表期日

11月11日（金） 2限 \*印刷の都合があるので、11月9日までに発表レジメを藤原までもってくる。藤原が人数分印刷します。

授業中にグループの活動時間が必要だと考えて、わずかだが、授業終了前にグループ話し合いの時間を5分とった。自己紹介をさせるとともに、どんなテーマでプロジェクト学習をするかについて話し合いをさせた。そして、各グループをまわり、テーマを聞き、アドバイスをした。このグループ話し合いはその後も毎回授業終了5分前に実施した。短期間ではあったが、各グループは、授業終了後も集まりをもち、テーマ、調査内容の分担、調査日時などを決め、フィールド調査を行ったようである。「班活動の時間がとても短いため、初めて知り合った人とは、連絡を取り合ったり、授業の空き時間を調整したり、調査に行く日程を決めたりと、そのやりとりで追われて内容を多少おろそかにしてしまったように思われる」という感想があり、今後の課題として残った。

発表レジメの作成にあたっては、「Eメールを活用し、パソコン上でお互いの執筆部分をやりとりしてレジメを仕上げた」グループもあった。そのグループはレジメのまとめりと完成度は高かった。多くは、それぞれで分担して、自分の分担部分をA4用紙にまとめ、それを合わせてグループの発表レジメを提出していた。そのためか、全体とのつながりと協働が不足し、ややまとまりに欠ける発表になったグループもあった。

### 3. 沖縄における「平和と教育」についてのグループ発表

各班の発表は次のような内容であった。

#### 1 班…嘉数高台公園

琉球大学から遠くない場所に嘉数高台公園がある。今は閑散としたのどかな公園で、親子連れで遊んでいたりして、憩いの場になっているが、ここは沖縄戦の激戦地であった。発表では、場所の説明にはじまって沖縄戦での嘉数高地の戦闘の様子が述べられ、北斜面のトーチカ（小型の要塞）、京都の塔、青丘之塔、嘉数高台公園から一望した普天間飛行場が分担して発表された。

京都の塔は、この地で闘った日本軍の第62師団に京都出身者が多かったことにより、京都府出身の2530名余りの将兵が弾雨の犠牲になったことを哀悼して建てられたものだが、碑文には、「多くの兵隊や地元沖縄住民への哀悼の念と戦争への反省が刻まれている。さらに、戦争のない平和で、沖縄と京都が文化での交流を通して友好が築いていけるようにという願いが込められている」。発表者は、「このような当時の人々が体験した事実を自分のまわりの友達やこれからの世代の人々に伝え、ひとりひとりがこれからの平和について意識していく必要があるのではないかと思った」と述べた。

青丘之塔は、日本軍に無理やり連れてこられた朝鮮・韓国の軍人、慰安婦のために建てられた碑である。男は軍人として矢面に立たされ、女は慰み者とされた。彼らは戦場で最も弱い立場にあり、最も危険にさらされた。発表者は、「京都の塔をはじめとするきれいに整備された土地から外れて、あまり目立たない場所に建てられていた慰霊碑が私の目を惹いた」、「日本政府は彼らに対して『誠心誠意』の謝罪をしたことはないと聞く、60年も経ったから関係ないという態度では、いつまでも彼らの心から憎しみは消えることはないと思う」と述べた。

レジメは、現地で撮影した碑などの写真を効果的に挿入し、わかりやすくできていた。

#### 2 班…沖縄の「戦争と平和」についての児童書・絵本

2 班では、ひめゆり学徒隊として戦場に動員された1人を主人公にして沖縄戦の様子を描いた下嶋哲朗『八月二十二日の太陽』（フレーベル館、1976年）、沖縄戦のエピソードを寓話的に語った田島征彦『てっぽうをもったキジムナー』（童心社、1996年）、本島を離れ波照間島へ移住を強制された住民たちがマラリアにかかり死んでいった史実を描いた宮良作『忘れな石』（草の根出版会、1992年）を、実際の児童書・絵本を持ってきて紹介するとともに、沖縄戦について紹介した。

### 3班…対馬丸について

学童疎開船・対馬丸は鹿児島県壱石島近くで米潜水艦の魚雷攻撃を受けて沈没し、乗員1788名のうち1418名が犠牲になった。救助された人々には緘口令が敷かれ、撃沈の事実を話すことが禁じられた。対馬丸撃沈事件が知られるようになったのは、戦後しばらく経ってからであった。

3班は、2004年に建設された対馬丸記念館を訪れ、館内を見て歩き、衝撃を受けた。対馬丸記念館で購入したガイドブックを手にして、「対馬丸とは…」「対馬丸記念館建設の経緯」「対馬丸記念館について」「平和教育を考える上で（感想）」について発表していった。発表レジメは記念館の資料（写真、絵図など）をふんだんに織り込み、わかりやすくまとめられていたし、全体的なまとめと協働が感じられた。発表では、臨場感と見学者の思いがよく出ていた。

「平和教育を考える上で（感想）」のいくつかを紹介しよう。

「資料館の展示資料の一つ一つを見ているうちに、怖かったです、悔しかったです」と胸を締めつけられるような感じがし、遺影からは、『なぜ私たちは生きられなかったのだろう』そして『私たちが忘れないで』という思いが感じ取れました。彼ら一人ひとりが持っていた命は、大人が始めた戦争によって奪われてしまいました。そしてそのときから、彼らの生きるはずだった未来も彼らのもとからなくなったのです。しかしその未来を私は生きています。そんな私は、彼らの未来を生きられない悔しい気持ちを、また60余年前の間違いなくこの地に起こったことを忘れてはいけません。」

「戦争による最大の犠牲者は子どもや女性、老人をはじめとする弱者であることは時代を隔てても共通な事実だ。『戦争を始めるのは人間だが、戦争を拒み、平和をつくり出すのも人間』という言葉に深く胸を打たれた。平和をつくりだす人間を生み出すためにも平和教育の重要性が見出される。その出発点とし

て、身近にある平和・戦争関連施設を訪ね、自分と共有できる点を探しだすことがなにより平和への近道ではないかと思った。」

### 4班…ひめゆり平和祈念資料館を考える

授業でも紹介した、ひめゆり学徒の証言を「退屈で、飽きてしまった」とした青山学院高等部の高校英語入試問題に触発されて、ひめゆり平和祈念資料館に見学に来た修学旅行生（高校生）を観察し、体験レポートを発表レジメにまとめた。「ひめゆり平和祈念資料館にきている人たちはどういった気持ち・様子なんだろうか」という明確な問題意識のもとでフィールドワークをし、チームワークが良く取れていた。

2つの学校の修学旅行生を比べて、考察した部分は圧巻であった。A校はほとんど素通りで興味を示さなかったのに対して、B校では手紙をじっくり見て「この時代も、びっくりマークを使うのだね」と驚いていた。ひめゆり学徒についてある程度事前学習をしていて、興味深く展示物を見ていた。

学徒の顔写真の展示の中に、黒い写真があたりこちにあったが、A校の生徒はそれに気づき「なんでないの？」と友達に話していたが、すぐに「写れなかったんじゃない？」と言って次に進んでいった。B校の生徒も同じように立ち止まり「何でないの？」と聞いていたが、「戦争で燃えてしまったんじゃないの？」「お墓にうめっているのかな？」と話していた。歴史的想像力を働かせているかいないかの違いがあった。

「なぜ、こんなに同じ生徒でちがうのかと思ひ、ガイドさんがいるのかいないのかだと（最初は）思いました。しかし、ガイドさんではなく、教師の違いだったのです。」とし、A校の教師は「先生これどういう意味？」という質問に、「ん～、わからんなー」と答えていた。この質問は事前に知っておくべき内容だった。A校とB校のちがいは、事前学習の違いにあると発表者はとらえた。それを踏まえて、「事前に学習しておく必要がある。きちんと行っていなかったら、ひめゆりの第

1 展示室は退屈だと思います。ひめゆりがどんなものであるかを知ってからこそ、ここの意味が出てくるのだと思います。」と述べている。

ひめゆり平和祈念資料館の証言員の「生の証言」について、「総括」として、次のように語っているのは重要である。「この資料館の中核は、間違いなく元ひめゆり学徒の人たちの『生の証言』である。…この資料館にとって『展示物（映像を含む）』と『証言員』は車の両輪のようなもので、どちらが欠けても学習効果が上がらない。事実、証言員がいるときと、証言員が休憩中・その他の理由でいないときとでは、入館者が館内を回る速さが違う。もちろん、いるときの方が『ゆっくり』回っているのである。」。よく観察しているのには感心する。

文章だけではイメージできない部分があるので、各班の作成した発表レジメの一部を「おわりに」の後に掲載する。参照されたい。

#### 4. グループ発表を聞いて

各班の発表を聞いた後で質問の時間を取ったが、授業者が質問しただけで、質問は出なかった。少し時間を取って、ワークシートに感想・コメントを書いてもらった。すべての発表が終了した後で、「発表会全体の感想」を書いてもらった。

(1) 各班の発表についての感想・コメント  
〈1班…平和教育フィールドワーク〉

- 嘉数高台についてとてもよく調べられていた。高台の展望台から見える普天間基地（飛行場）と沖縄戦当時の戦争を絡めて、これから平和のために努力していこうという意図を表しているところがよかった。
- よく知られているものだけでなく、目立たないもの（青丘之塔）にまで目をつけてよかった。
- くわしく説明されていて、とてもわかりやすかった。しかし、こういうことはネットなどで調べられるので、実際に行ったのなら、その率直な感想を発表してほしい。

- それぞれの場所についてよく調べられていて、当時どのような戦争が行われたかもわかった。けれど、嘉数高台の戦いは本当にひどいもので、肉弾戦は軍人ではなく地域の住民が行ったんです。すごくおかしいことなのにそこについてコメントもないし、また、戦後京都の遺族と沖縄県民が何度も連絡を取ってあの碑文をつくったことにもぜひ触れてほしいし、県民に対するあの碑文がなぜ京都の塔だけしかないのか、ということもとても大切で、戦争について考えなければいけないことだと思うから触れてほしい。

〈2班…沖縄の「戦争と平和」についての児童書・絵本紹介〉

- 絵本・児童書の中に、戦争の恐ろしさ、愚かさがわかりやすく描かれており、平和を学ぶ上でよい材料であることがわかった。
  - 今日紹介していた本を読みたいと思った。
  - 戦争はいやだという思いが込み上げてきました。
  - とてもよかったと思う。本の紹介をしながら戦争の問題点を淡々と述べていた。聴いているほうは「なぜ？」と思わせるよう考えさせるきっかけになるような発表だった。「忘れな石」は銃で死ななかった戦争、これをもっと問いかけてほしい。
  - 児童書・絵本から得られた知識や考え、感想を具体的な形で明示すべきだと感じた。
- 〈3班…対馬丸について—対馬丸記念館—〉
- レジュメがコンパクトによくまとまっている。パンフレットを使いながら記念館の紹介をしている。自分の言葉で語っているところがすばらしい。ちゃんと見てきたものを消化していないとなかなかできないことである。最後にメンバー全員の感想などがまとめてあるところがよいと思った。
  - 対馬丸に乗ってなくなられた子どもたちの情景が見えて、とても胸が締め付けられるような気がしました。私も記念館に行きたいと思いました。

- とても心に響く発表でした。沖縄戦での犠牲者は本島の激戦でなくなっただけでなく、疎開船での子どもたちも犠牲になり、なんとむごいと感じました。
  - 対馬丸記念館に行くことによって、平和への考え方が広がる気がしました。  
<4班…ひめゆり平和祈念資料館を考える>
  - 個々人が実際にひめゆり平和祈念館を訪れ、そこを訪ねていた修学旅行生の様子を学校別に比較したり、感想を述べたりしていたのがよかった。
  - 館内のパンフレットがあり、よかった。前回の青山学院高等部の英語試験問題を受け、そこに焦点をあてたのがよかったと思う。発表を聞いて、「平和学習」が退屈だったというように感性が鈍ってしまうのはまったく知識がない状態で訪れてしまうからだと思った。
  - 「体験レポートⅡ」には考えさせられる部分が多くありました。
  - 事前学習を行ったか行っていないかで、生徒の学ぶ意欲が変わってくるのは、確かにそうだなと思う。教師の力量が問われるところだろうし、もし私が教師の立場であったら、きちんと生徒に学習させてから行きたいと思った。
- (2) 発表会全体の感想
- 戦争の激しさや恐ろしさ、そして平和に対する希望を、各班がそれぞれの形で表しており、そのためにいろいろな見方から平和教育を眺めることができたので、とても有意義であった。
  - めんどくさ〜い、と思うこともあったが、終わってみるととてもすがすがしい気分。各班、ちゃんと連携しているところもあれば、いきあたりばったりでやっているのかな？というところもあった。しかし、それぞれに「平和」を考え直すきっかけになったと思う。ふだんは「受け手」として授業を聞くことが多い中で、情報の「送り手」としてメッセージを発することで平和に対する今後の取り組み方も変わると思う。
  - みんなの発表形式の高さが感じられた。それは平和学習に対する意識が高いことにもつながるのではないかと思った。
  - 平和教育について、他の人の意見が聞けて本当によかったと思いました。それは、これまで自分がもっていた、平和教育をどう行すべきか、どうしたらより伝わるかを、他の人の考えを参考にしてさらに深めることができるからです。今日のこの発表内容は、自分が教師になって生徒に平和教育を行う際に大きく影響を与えるだろうと思います。
  - 戦争に関わることについて、様々な場面・見方での説明があり、とてもよいものになりました。私も考え続けていきたいと思いました。
  - それぞれ見る問題はちがっていましたが、思いを受け、すごく共感することもあって、新たに勉強していきたいと思いました。
  - 知識としては知っていても、実際に訪れて調べるのとはまるっきりちがうということ、自分はもちろんみんなそれぞれ感じたと思う。
  - 他のグループがテーマをきめ、それについて調べる過程などを知ることができたのもよかったです。
  - 今回の経験をもっと膨らませて、将来「平和教育」をするときに役立てたらよいと思う。ただ、時間が余りなかったので、グループが活動する時間を増やしてほしい。
  - 実際にフィールドワークを行って平和について考えるよい機会だった。勉強になった。
  - 同じ学生が熱く発表してくれることで平和についての思いが深まったりして、とても勉強になりました。(ワークシートではなく、各人が思ったことを一人一人に発表させると共有できる。)
- (3) コメントへの授業者の感想
- ①それぞれのよさを率直に書いていた。発表内容と発表方法についても各グループのよかった点を具体的に指摘していた。各グルー



ブのプロジェクト学習の大変さを実感したからこそ、共感できたのであろう。

②厳しい批判も書かれていた。「嘉数高台の戦いは本当にひどいもので、肉弾戦は軍人ではなく地域の住民が行ったんです。すごくおかしいことなのにそこについてコメントもないし、また、戦後京都の遺族と沖縄県民が何度も連絡を取ってあの碑文をつくったことにもぜひ触れてほしいし、県民に対するあの碑文がなぜ京都の塔だけしかないのか、ということもとても大切で、戦争について考えなければいけないことだと思うから触れてほしかった。」という内容上の批判や、「調べた事実だけでなく、率直な感想も書いてほしい。」というレジメの作成方法・発表方法への批判もあった。「通信」に掲載されたこのような批判を読むことによって、発表がきれいごとにならず、質的に高まる重要な契機になるように思われる。

#### おわりに

—グループによるプロジェクト学習の意義—  
プロジェクト学習を個人学習にしないで、グループ学習にしたことは、時間の調整やレジメ作成上のむずかしさにもかかわらず、グループのメンバー間で相互のかかわりを生み出し、協働をとおして得ることが多かったようである。最終レポートの中の「授業の感想」に次のようなものがあった。

「私が平和・人権と教育の授業で一番印象に残っているのは、グループでのフィールドワークだ。私たちのグループはひめゆり平和祈念資料館について調べた。…実際にひめゆり平和祈念資料館に見学に行き、グループの人々と意見を交換し合っていた。他の人の意見を聞くことによって、より客観的に物事を考えることができた。自分ひとりではひめゆり平和祈念資料館についてここまで調べ、

深く考えることはできなかったと思う。グループでの意見交換、共同作業のおかげで理解を深めることができた。」

彼は、発表会でも、学ぶところが多かったと書いている。「他のグループの発表を聞くことによって、さらにいろいろな知識を身につけることができた。このグループでの発表はとても意義のあるものだったと思う」としている。

この「平和と教育」のフィールドワークにおいては、グループのメンバーが沖縄県の者か、他府県の者かということも、ちがいを浮き彫りにさせるのに貢献していたようだ。ある学生は「ひめゆり資料館に行った班の発表はとても印象的でした。本気で平和について考え、怒り、話をされていると感じました。そのとき感じたのは、ウチナンチュとナイチャーの温度差でした。熱く語るのは沖縄の人が多い気がしました。基地問題を他人事と考えるのはやはり私たち本土の人間なのだろうかと考えてしまいました」と述べている。このことを顕在化させて深めていくこともあってよかったように思われる。

グループによるプロジェクト学習は、時間的制約もあり、学生に無理を強いたが、それでも緊張感の中で学ぶことが多かったようである。

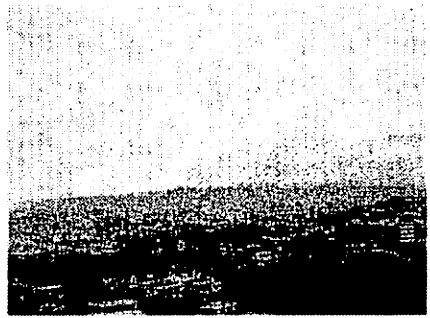
ある学生は、「グループ学習は今回が初めてだと藤原先生がおっしゃっていたが、戦争について考えるためにもグループ学習は絶対に必要だと思うので、これからもずっとやってほしいと思う。大学生もやり始めるまでは、他のレポートもあるしあまりやる気がしないと書いていても、意外にやり始めると楽しくてもっともっと調べたいと思うはずだ。実際に友達や自分もそういう感じだったので…」と述べており、授業者はこのような感想に励まされた思いをしている。

## 資料 沖縄における「平和と教育」についてのグループ発表会のレジメ（一部分のみ）

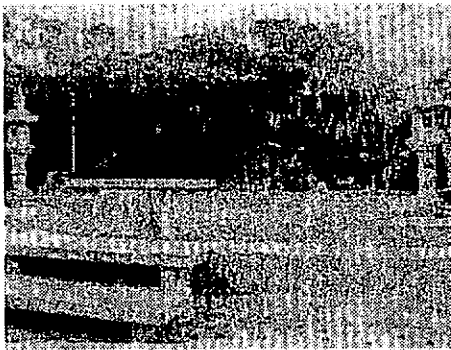
### 1班 嘉数高台公園 「京都の塔」

島嶼文化教育 ○○○○

宜野湾市の嘉数高台からは沖縄戦当時、米軍の上陸した読谷海岸をのぞむ事が出来る。読谷海岸から上陸南下してくる米軍に対し、日本軍は大謝名から和宇慶にいたる線に首里の軍司令部を防衛する強固な地下陣地をかまえた。嘉数高台は防衛戦の中核のひとつであった。米軍は上陸してから嘉数の地点ではじめて日本軍の激しい抵抗にあった。米軍はこの丘陵地帯に海からの艦包の援護をうけながら、戦車や火炎放射器で猛攻を加えた。



山はかたちを変え、洞窟陣地やトーチカは土石でうもれてしまったが、日本兵や地元住民は爆雷をかかえて戦車に体当たりをしたり、夜間に敵の陣地に斬り込むなどの肉弾戦法をとった。二週間以上にもわたって一進一退の激しい攻防戦をし、双方ともに多大な死傷者を出した。この嘉数高台の丘にある「京都の塔」は、この地で戦った日本軍の第62師団に京都出身者が多かったことにより建てられた。この「京都の塔」にある碑文には「昭和20年春沖縄島の戦いに際し京都府下出身の将兵二千五百三十有余りの人々が一弾雨の中に倒れた、また多くの沖縄住民も運命を具にされたことは誠に哀惜に絶えない一再び戦争の悲しみが繰り返されることのないようまた



伏せて沖縄と京都とを結ぶ文化と友好の絆がますますかためられるようこの塔に切なる願いをよせるものである。」と刻まれている。この碑文には、ここで激しい戦闘となり戦死した多くの兵隊や地元住民の犠牲者への哀悼の念と戦争への反省が刻まれている。さらに、戦争のない平和で、沖縄と京都が文化での交流を通して友好が築いていけるようにという願いが込められている。

このように、沖縄の嘉数と京都との接点は沖縄戦に関連してつくられたわけであるが、過去の戦争を反省した上でこれからは平和をともに作り、文化での交流を通して友好の絆をふかめ築いていこうというのは、過去を見つめ学びその土台の上に将来の平和を考えていくという意味でとても意義のあるようなものに思う。

この嘉数高台での「京都の塔」から、この地では軍と住民が激しい戦場のなかで運命をともにして何千という多くの人々が戦死したのを知り、このような当時の人々が体験した事実を自分のまわりの友達やこれからの世代の人々に伝え、ひとりひとりがこれからの平和について意識していく必要があるのではないかと思った。

## 2班 沖縄の「戦争と平和」についての児童書・絵本

平和・人権と教育

発表者 (2 グループ) :

〇〇〇〇、〇〇△△、□□〇〇、〇〇□□、□□△△

### THEME: 沖縄の「戦争と平和」についての児童書、絵本紹介

下嶋哲郎 『八月二十三日の太陽』 フレーベル館 1976

#### 【著者の略歴】

1941年長野県上田市生まれ。上京後独学で絵画を学びグラフィックデザイナーとなる。受賞歴も多数。その仕事を捨て1976年には石垣に移住する。古老の人生の聞き書きをベースとした、現代の民話を創造する絵本作家、ノンフィクション作家として独自の世界を拓く。翌年には東京に戻る。韓国、アメリカ等広範囲を取材する、各国を又に掛けた人物。

#### 【本の内容】

戦後35年日にして行われたひめゆり学園の卒業式で、主人公の渡久山昌子<sup>153</sup>が戦争時を回想するところから物語は始まる…。

昌子には「ヨシちゃん」という幼馴染が存在した。二人は遊ぶ時も登下校時も常に一緒に行動していた程仲が良く、入学試験難易度の高いひめゆり学園にも共に合格し、通学していた。しかし戦禍に巻き込まれ、3/23にアメリカ軍の敵機動部隊が沖縄上陸の為の本格的な爆撃を開始したのを皮切りに、ひめゆり学徒隊として南風原の陸軍病院へ向かい同月25日には従軍。衛生設備の儘ならぬ陸軍病院で、次々と搬送される負傷兵に解除を必要とされながら就寝する間もなく従事するが、戦局の悪化により6/19軍が解散命令を下し、激戦が展開されている最中戦場へと放り出される。学徒達は戦火を逃れるべく南端の喜屋武岬へ移動を始めるが、砲弾によって、昌子は投げ所となる教師、ヨシちゃんと引き裂かれ、離れ離れになる。6/23に牛島司令官が自決した事を知らずに他の学友と共に移動を続け、8/22に捕虜となるまで、知り合った兵隊の居る壕で地底を這うモグラのような戦々恐々とした生活を送る。

結局昌子の母親と祖母は、祖母自身の知恵により沖縄上陸作戦が開始された当日に捕虜となり一命を取り留めていたが、ひめゆり学徒隊として戦線に動員された生徒と職員320名の内、死者は219名に達した。「死ぬ時も一緒だ」と言い合っていたヨシちゃんもその犠牲者となった。また幼くして通信隊員に志願し、軍に入隊した弟のアサオも「日本男児として潔く」自決していた。個人の命の尊厳よりも日本の民として国の為に仕え、死ぬことが名誉とされていた戦争の愚かな風潮により、狂気に晒された概念の中で戦に駆り出された兵隊を含め、死ななくてもいい人々が生命を投げ出し、意思とは無関係に生きる権利を剥奪されていた。

### 3班 対馬丸について

平和・人権と教育「沖縄における平和と教育について」2005/11/11

## 対馬丸について [3] ○○○○、○○△△、□□○○、○○□□、□□△△

### I. 対馬丸とは...

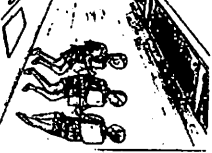
1941年12月にはじまったアジア太平洋戦争。翌年の夏から日本軍は敗戦を重ねるようになり、1944年7月7日、ついにサイパン島が占領されました。「サイパンの次は沖縄だ」と判断した軍の要請で、政府は奄美大島や徳之島、沖縄県の年寄り・子供・女性を島外へ疎開させる指示を出します。

予定人数は、日本本土へ8万人、台湾に2万人の計10万人。しかし県民の疎開はなかなか進みません。「勝つ、勝つ」を繰り返す軍の言葉に、沖縄が本当に戦場になるのか判断がつかず、また周辺海域の危険をそれとなく知っていた県民にとって、船に乗ることは一つの「賭け」でした。7月19日、県は「沖縄県学童集団疎開準備要項」を発令し学校単位で疎開事務をすすめます。多数の兵士が沖縄に移駐し大量の食糧が必要になり、足手まといになる民間人を島外へ移動させることは急務だったのです。いっぽう子ども達は「ヤマトへ行けば汽車にも乗れるし、雪も桜もみることができる」と修学旅行気分ではしゃいでいました。

対馬丸(6754トン)は、1944(昭和19)年8月21日夕方、疎開学童、引率教員、一般疎開者、船員、砲兵隊員1788名を乗せ、同じように疎開者を乗せた和浦(かずうら)丸・暁空(ぎょうくう)丸と護衛艦の宇治(うじ)・運(はす)を含む計5隻の船団を組んで長崎を目指し出航しました。しかし翌22日夜10時過ぎ、鹿児島県・悪石島の北西10kmの地点を航行中、米潜水艦ボーフィン号の魚雷攻撃を受け対馬丸は沈められてしまいます。建造から30年も経った老朽貨物船・対馬丸は航行速度が遅く、潜水艦の格好の標的だったのです。

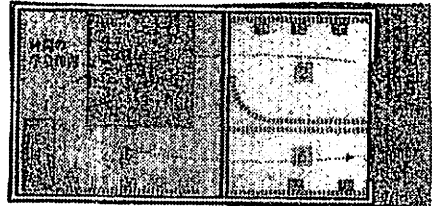
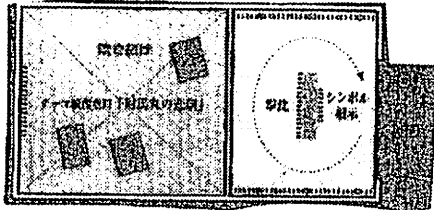
ほとんどの乗船者は船倉に取り残されましたし、海に飛び込んだ人も台風の接近に伴う高波にのまれました。犠牲者数1418名(氏名判明者=2004年8月現在)。イカダにすがって漂流した人々は、付近の漁船や海軍の哨戒艇に救助されたほか、奄美大島まで流されるなどして生き延びたのです。

救助された人々には「指口令(かんこうれい)」がしかれ、対馬丸が撃沈された事実を話すことを禁じられました。犠牲者や生存者に関する詳細な調査も行われず、沖縄に残された家族に正しい情報が伝わることはありませんでした。また対馬丸事件の後、10月10日には那覇を中心に大空襲があり、翌年の地上戦では県民の4人に1人が犠牲になるなど、さらなる戦争被害を被ったため、対馬丸撃沈事件が知られるようになったのは戦後しばらく経ってからでした。大人が起こした戦争の為に理不尽にも幼い子どもたちがその犠牲になったことから、戦後「学童疎開船対馬丸の悲劇」として語られるようになっていきました。



### II. 対馬丸記念館建設の経緯

1950年10月、犠牲者の家族たちは遺族会の活動をスタートさせました。1997年、遺族会からの要請に基づいて行われた悪石島(あくせきじま)沖海底捜索の結果、12月12日船体が発見されました(北緯29度31.93分、東経129度32.90分、水深871m)。遺族は引き揚げを要求しましたが政府は対馬丸船体引き揚げ可能性調査検討専門家会議の結論を受けこれを不可能とし、代替案として「記念館」の建設が持ち上がりました。2001年6月、「対馬丸記念館」が全額国庫補助で建設されることが決まり、対馬丸遭難者遺族会は財団法人対馬丸記念会へ組織移行し、記念館建設のための独自運営を始めたのです。



#### 4班 ひめゆり平和祈念資料館を考える

### 体験レポートⅡ

私が行ったときは、二つの学校の修学旅行生が来ていました。はじめの学校(A)は、ほとんど素通りで興味をしめませんでした。そればかりか、笑い声すら聞こえる始末でした。その後すぐの学校(B)の様子も、同じ感じだろうと思っていたら、次のBは様子が違っていました。ひめゆりの青春では、手紙をじっくりみて、「この時代でも、ビックリマークとか使うんだね!!？」と驚いていた子もいました。この展示室の『わたしたちひめゆりも、あなたたちと同じ年代だったんだよ。この年代で戦争に向かったんだよ』というメッセージが、伝わっているのではないのでしょうか。少なくとも、展示してある手紙から、身近に感じる事ができていると思います。このように、一つ一つ丁寧に見る子がBには多かったのです。もちろん全員ではないですが、AとBでは資料館をみる態度が全然違いました。

なぜ、こんなにおなじ生徒でちがうのかと思い、ガイドさんがいるのかいないのかだと思いました。しかし、ガイドさんではなく、教師の違いだったのです。Aの教師は、はっきりいって何を目標として沖縄に来て平和祈念資料館に来て、何がしくて平和教育を行おうとしたのかわからない態度で資料館をまわっていました。「先生これどういう意味〜?」「ん〜わからないなァ…」わからないのは別にいいと思うのですが、あの時生徒が聞いたのは教師が沖縄で平和教育をしたいと思うなら事前に知るべき内容だったと思います。Aの教師の様子を見ると、事前に沖縄戦について学習されていないことが、たった数十分でわかりました。

B校は先生の資料館をみてまわる様子が明らかにBとは違いました。Bはおそらく、事前学習を行っています。ある生徒(女の子3人組)に話を軽く聞いたところ、ひめゆり学徒が何をしていたのかを知っていました。一番印象に残ったことは、ひめゆり学徒の写真の前でAとBが言った言葉です。写真の中には黒く写っていないものが混じっていました。Aの生徒はそれに気づき「なんでないの？」ということ話を話していましたが、すぐに「写れなかったんじゃない？」といいまた次に進んでいきました。Bの子も立ち止まり同じようなことを疑問に感じていたのですが、今度は「戦争で燃えたりしたんじゃない？」や「お墓に埋めてるのかな？」といったことを話していました。

AとBには、大きな違いがあって、Bは平和教育が実践されていると思いました。しかし、もっと強く思ったことは、AもBと同じように写真に気づき、疑問を持ったのにそれを引き出すことができなかつたことがうやしかったことです。生徒たちは、内容の差はあるかもしれませんが引き出すことができるのに、(おそらく)教師の意識の違いでそれができなかったのです。つまり、沖縄に平和教育をしにくるなら、事前に学習しておく必要があるということです。きちんと行っていなかったら、ひめゆりの第一展示室は退屈だと思います。ひめゆりがどんなものであるかを知ってからこそ、ここの意味がでてくるのだと思います。平和を伝えるのはとても大切なことです。だからこそ、今学生の段階で戦争について知らないといけないと思います。